翻訳という世界

船越　隆子
翻訳家

ダジャレ　言葉遊びは万国共通〈9〉

今年は7月にテレビがついに地上デジタル化され、ここ何年かテレビで親しまれてきた「地デジカ」も役割を終えた。地デジ化をもじって「鹿」にしたアイデアは面白かった。「地デジカすんでる」を、「済む」と「住む」にかけたCMには感心してしまったくらい。巷では「アナログマ」という絶滅危惧種の熊もいたらしい。

言葉遊びは楽しい。大阪のお笑い文化を見て育ったせいだろうか。翻訳をしていても、どこかで「笑いの要素」を入れられないかと無意識のうちに考えていることがある。原文にダジャレなんか出てくると、がぜん張り切る。英語の言葉遊びをなんとか和訳に取り入れられないか、と思ってしまうのだ。

学校で習う英文和訳では、ただその単語の訳語をつなぎ合わせて日本語にすればいいと思っていた。意味が通ればいいわけで、日本語の内容を工夫するところまでは思い至っていなかった。

記憶している最初は、翻訳学校の授業だった。教材の英文自体はもう忘れてしまったが、コメディータッチの小説だったので「tooth（歯）」と「ache（痛い）」と「toothache（歯痛）」といった単語をおもしろおかしく組み合わせた原文だったと思う。言葉の重なりのおかしさをなんとか日本語でも表せないかと考えて、「虫歯にむしばまれる」と訳したら、なかなか面白いと先生に褒められた。今思えば、訳文の出来としてはどうかと思うが、でもこの時に楽しく訳せたことに味をしめてしまったのかもしれない。

以来、翻訳をしていて、言葉遊びのできそうな箇所を見つけると、どうにかしてその面白さを日本語でも出してみたくなる。ダジャレなら、もちろん訳文にもダジャレを入れたい。

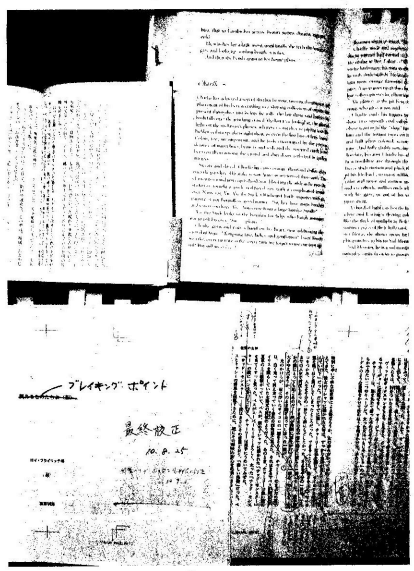
けれども、実際にはそう簡単にいくものではない。ダジャレになっている英語の単語を日本語に訳し、かつダジャレにするというのはなかなか至難の業だ。

例えば、英語で「See you later, alligator.」というのは、考えること自体無理があるのかもしれない。

前回紹介した拙訳書「プレイキング・ポイント」という小説の中でも、思い出した。本当は「Blowing It!」だった。「しくじる」「失敗する」という意味でよく使われる言葉だ。

この「ウィング」と「プローウィング」の言葉に、韻を踏んだ訳語をつけられないだろうかと思案した。その結果、「Wing It!」は「飛んだ！」、「Blowing It!」は「ぶっ飛んだ！」と訳した。この小説の原題が「Winged Creatures」なので、「Wing」や「飛ぶ」という言葉も大事に生かしたかったのだ。

言語はそれこそ千差万別だけれど、言葉遊びはきっと万国共通。どの言語にも言葉を紡ぎ出す面白さがある。言葉のそういう魅力があるからこそ、この仕事を長く続けてこられたのかもしれない。（徳島市在住）



船越さんの訳書「プレイキング・ポイント」の校正中のゲラ

笑いの要素　和訳に生かす